



[格納庫 2] 事務室 3 より北側エプロンを望む



[格納庫 1]



[ブリーフィングルーム] 腰壁は桧材に EP-G フォトリソグラフィ



[格納庫 2] 北側エプロンから格納庫 2 を見る



[北側外観]



[南側外観] アプローチより建物を見る

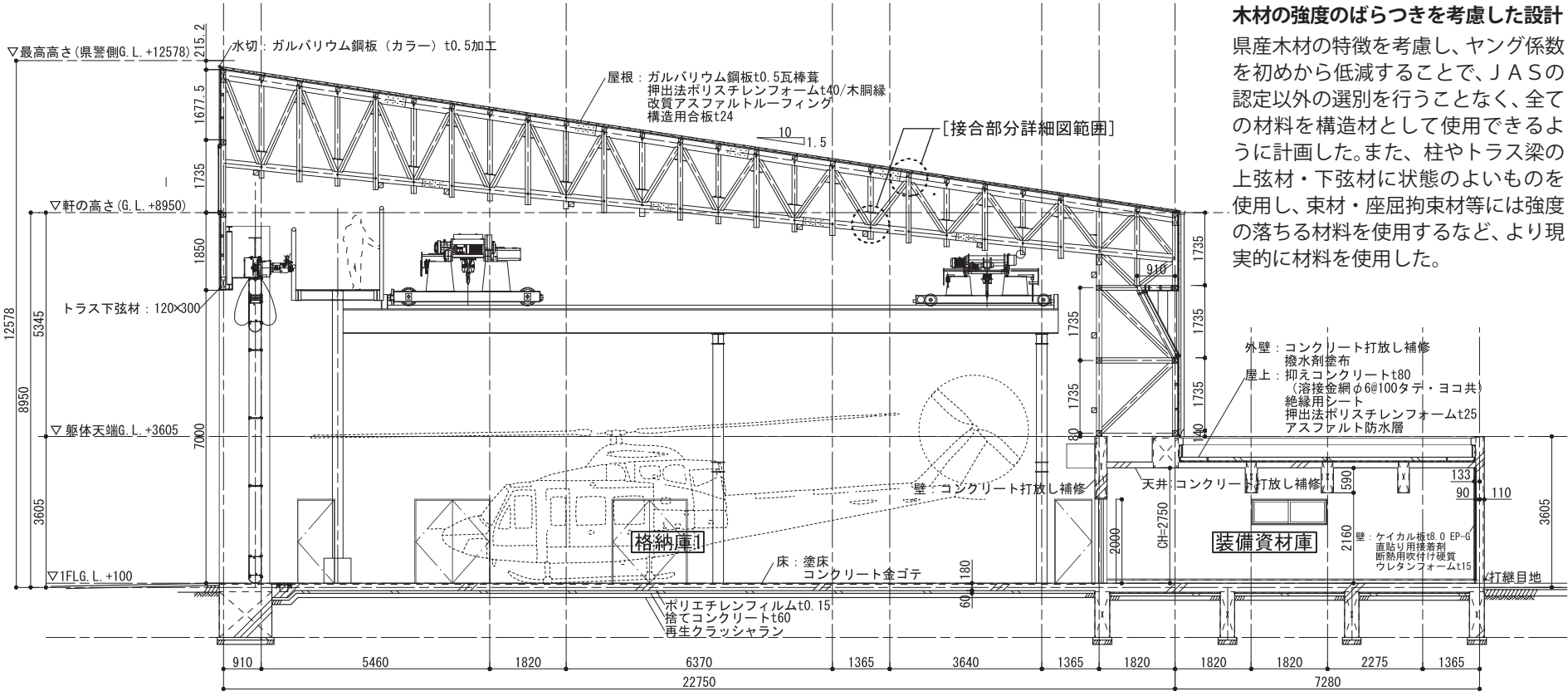
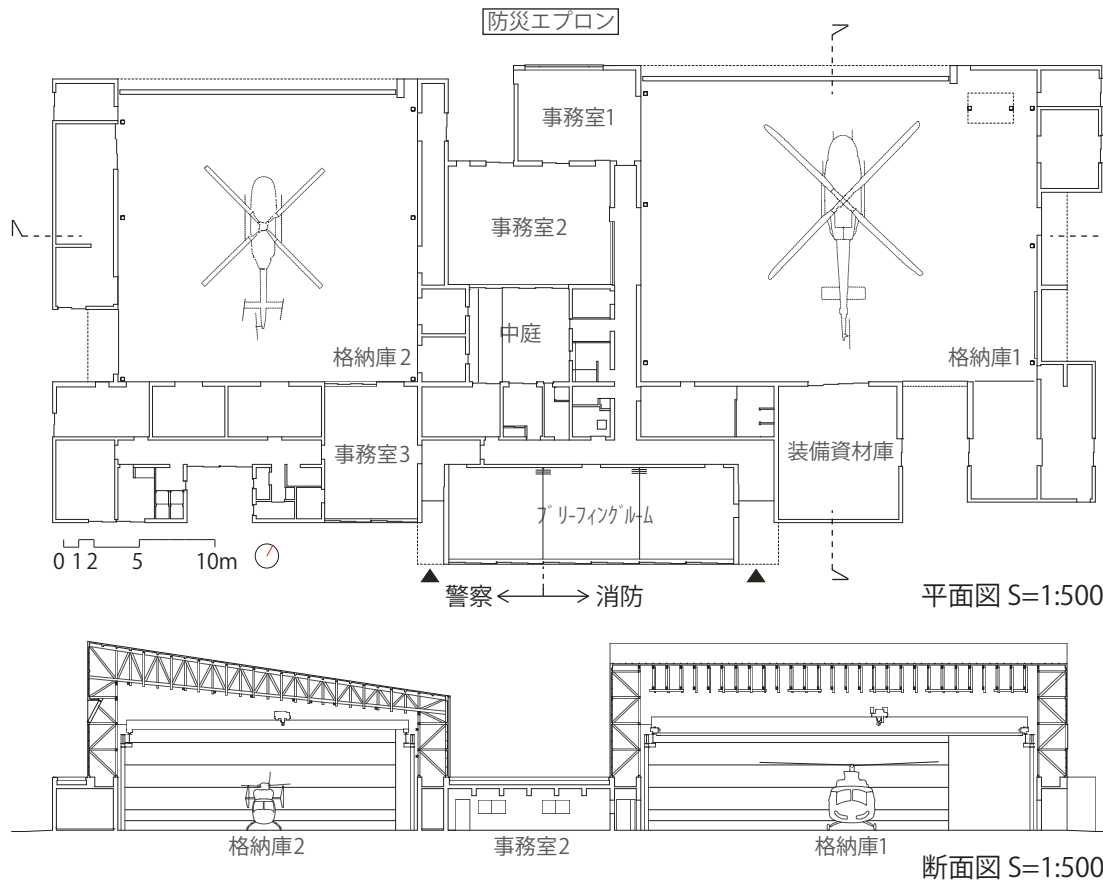
熊本県総合防災航空センター

九州の広域防災拠点として計画された、防災消防航空センターと警察航空隊基地の合築による総合防災航空センターである。設計・施工期間中に熊本地震を挟みながらも、関係者の粘り強い努力により、当初の計画通り木造の大架構建築が実現した。

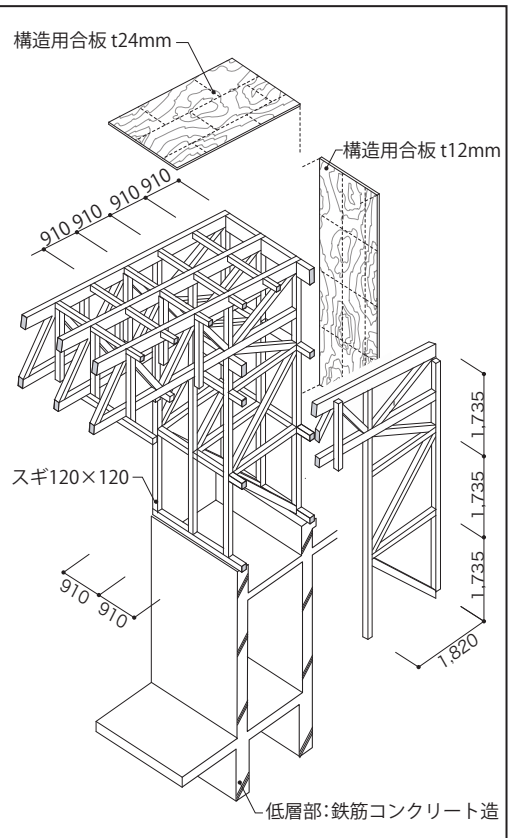
消防・県警両施設とも、ヘリコプター格納庫を中心に、その周囲に資材庫や事務室を配置し、日常時におけるヘリ整備や事務作業、また災害時における緊急出動の効率化に配慮した。さらに、両施設間にブリーフィングルーム（大会議室）を設け、大規模災害時の消防、県警及び各防災機関の支援ヘリの一体的な施設運用を可能としている。

構造的には、県産木材とコンクリートを適材適所で組み合わせた、合理的な構造・構法による建築としている。建物下部の倉庫や水廻り等は安定した性能を示す RC 造、格納庫（スパン約 20m）及びブリーフィングルーム上部は小径（120mm 角）の流通材と既成接合金物を用いた木造としている。このことにより、高い耐震性能を確保しつつ、今後大架構木造建築を設計する上で、また県産木材の活用による木質化を推進する上で参考となる建築を目指した。材料供給、加工・施工技術いずれの点においても、本来の意味での「地産地消」を満たす建築になったと自負している。

天然木を多用することで、「防災」という、用途上重要かつ緊急性の高い建築が、親しみのもてる、穏やかな空気に満ちた場となることを期待している。



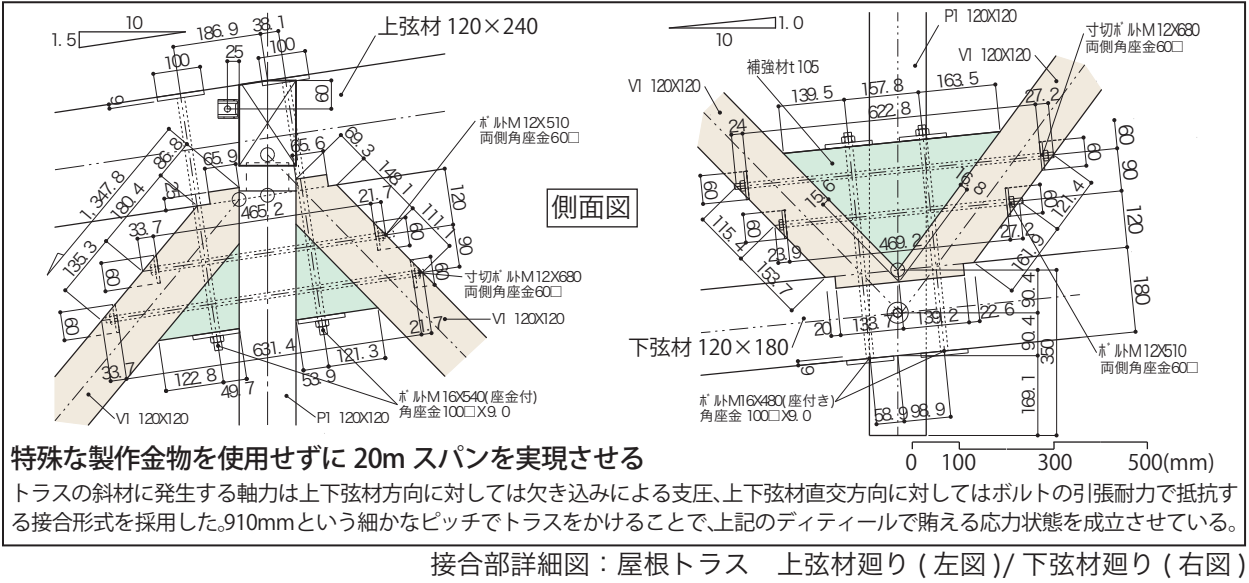
断面詳細図 S=1:150



構造システム図



[1/1 モックアップ] 詳細なディティール確認を行った



特殊な製作金物を使用せずに 20m スパンを実現させる
トラスの斜材に発生する軸力は上下弦材方向に対しては欠き込みによる支圧、上下弦材直交方向に対してはボルトの引張耐力で抵抗する接合形式を採用した。910mm という細かなピッチでトラスをかけることで上記のディティールで臨める応力状態を成立させている。

接合部詳細図：屋根トラス 上弦材廻り（左図）/ 下弦材廻り（右図）



[屋根架構施工写真] 屋根トラスは地組み後クレーンでつり上げる施工方法を採用した



[壁トラス]



[屋根トラス]